

令和 2 年 5 月 20 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12059

研究課題名（和文）転倒予防のための臨床判断力育成に係る省察モデル・省察ガイドラインの開発

研究課題名（英文）Development of a reflection model and a guideline regarding training of clinical judgement abilities for fall prevention

研究代表者

加藤 真由美（KATO, Mayumi）

金沢大学・保健学系・教授

研究者番号：20293350

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、看護師の転倒予防のための臨床判断力育成に係る省察モデル・省察ガイドラインを開発すること。【卓越した臨床判断の可視化】は臨床判断力育成に貢献する一方で、【罪悪感をもつ省察】はその育成を抑制することが明らかとなった。【転倒予防の臨床判断力を備えるための知識・技術・態度の基盤をもつ】支援を行った上で、【卓越した臨床判断力・技を自分の資源として蓄える】支援をし、転倒発生時は【的確に転倒者特性と発生背景状況を統合して捉えられるための省察】支援が臨床判断力向上につながる省察モデルとして開発した。調査結果から、本モデルとガイドラインは看護師の継続教育として使用可能と示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

卓越した臨床判断力を備えるには、長年に渡る看護実践過程での多くの意図的な省察（リフレクション）の繰り返し関わっている。若手の看護師にとって意図的に省察を行うことは難しい。失敗体験は省察の機会となるが、臨床判断力の向上に必ずしも寄与しない。そのため、効果的に省察モデル・ガイドラインを用いた教育が提供されれば、より早く失敗体験を回避した有効な臨床判断力の育成につながる。このことは、新人看護師のケア能力への自己肯定感が向上することや、行動予測が困難な転倒リスクの高い患者の転倒および転倒により生じる損傷の予防に貢献する。また、転倒予防を理由とした身体拘束の回避・解除のための教育の一部となる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this was to develop a reflection model and its guideline regarding increase clinical judgement abilities of nurses for fall prevention. We found that “visualization and verbalization of expertized clinical judgements” would contribute to increase clinical judgement abilities. On the other hand, “reflection with feeling of guilty” would decrease the abilities. The reflection model for fall prevention that we developed is consisted of; first of all, support for “having basis of knowledge, skills, and attitudes to increase clinical judgement abilities for fall prevention”, then support for “being able to save experts clinical judgements abilities and skills as own resources”, and support for “being able to appropriately integrate characteristics of patients and causes of specific occasions of falls with reflection”. According to our survey, the model and the guideline would be useful for continuous education of nurses.

研究分野：老年リハビリテーション看護

キーワード：転倒予防 臨床判断 リフレクション 省察 ガイドライン 看護モデル モデル開発 臨床判断力

1. 研究開始当初の背景

転倒予防は困難であり、病院の転倒率（[転倒・転落件数/入院のべ患者数] × 1000=‰）は長年の間未だに 2%台を推移し、また損傷発生率（平均損傷率/平均転倒率 × 100 = %）は 1.8-2.0% を推移しており、減少していない¹⁾。高次脳機能障害や認知症のある患者の転倒につながる行動予測は難しく、骨折や死亡事故が起こっている²⁾。入院患者を対象者とした転倒予防の介入研究を扱ったシステムティックレビューにおいて、転倒発生比率は 0.77 (95%信頼区間:0.52-1.12) であり、有効な介入方法をさらに探究する必要があると提言されている³⁾。

看護師の卓越した臨床判断は、変化する療養環境と患者状態において柔軟にリスク査定と個別対応を可能にするため、転倒リスクの高い認知障害のある患者の転倒予防に有効である⁴⁾。看護師が転倒予防策を決定するまでの臨床判断の構造は、経験知が関わっている⁵⁾。すなわち、卓越した臨床判断力を備えるには、長年に渡る看護実践過程での多くの意図的な省察（リフレクション）の繰り返しに関わっている。しかし、若手の看護師にとって意図的に省察を行うことは難しい。失敗体験は省察の機会となるが、臨床判断力の向上に必ずしも寄与しない。また、指導者にとっても新人・若手看護師への意図的な省察による臨床判断力育成は難しい現状にある。

そのため、効果的に省察モデル・ガイドラインを用いた教育が提供されれば、より早く失敗体験を回避した有効な臨床判断力の育成につながる。しかし、転倒予防の臨床判断力育成のための省察に関する開発や先行研究は見当たらない。本開発は、新人・若手看護師のケア能力への自己肯定感が向上することや、転倒リスクの高い患者の転倒および転倒により生じる損傷の予防に貢献する。また、転倒予防を理由とした身体拘束の回避・解除のための教育教材の一部となる。

2. 研究の目的

本研究の最終目的は、看護師の転倒予防のための臨床判断力育成に係る省察モデル・省察ガイドラインを開発することである。

3. 研究の方法

1) 用語の概念の検討

省察モデルを開発するため、およびそのデータ収集には、省察の定義を設けておく必要がある。そのため、省察の概念（省察という用語も適切か）の探索をした。

(1) データ収集方法

Walker and Avant 's Model of Concept Analysis⁶⁾による方法を用いて行った。データは、先行研究、専門書籍、辞典（広辞苑や Webster 's Dictionary）、専門機関の提言から収集した。

(2) 分析方法

研究者間で討議して偏り、見過ごし、思い込みがないか点検しながら進めた。

2) 省察モデル・ガイドラインの開発

(1) 研究対象者

看護師の転倒予防のための臨床判断力育成に係る省察モデルを開発するために、3ヶ所の一般病院に勤務している臨床経験5年以上の看護師（看護師長含む）を対象に調査を行った。

(2) 研究デザイン

質的帰納的研究デザインであり、半構成的インタビューによりデータ収集した。内容は「転倒予防のために日ごろ行っている臨床判断の内容や状況をおしえてください。そのことについて（定義を説明後）省察をしていますか？新人や若手看護師にそれらの内容を伝えてありますか？...もう少し詳しくおしえてください。」であり、時間は30-60分程度を予定した。基本属性についてを無記名の調査票から収集した。調査は、2017年9月～2018年3月30日に実施した。

(3) 分析方法

質的データの分析手順は次のとおりであった。録音したインタビュー内容を逐語録におこし、精読した。一つの文脈となるよう内容が異なるごとに切片化し、コードを設けた。内容の類似性と差異性を検討しながら、サブカテゴリ、カテゴリを抽出した。最終的に、サブカテゴリ・カテゴリの関係性からモデルとして構造化した。分析過程において研究者間で分析の妥当性を検討し、完成させた。また、数名の参加者に結果のまとめを提示して、その真実性を確認し、意見が両極に分かれた結果は看護師長に確認した。

基本属性のデータは記述統計により分析した。

(4) 倫理的配慮

本研究は、金沢大学医学倫理審査委員会から承認を得て実施した（承認番号：758）。研究参加は自由意思に基づくものとし、同意しなくても、また途中で辞退しても何ら不利益がないことを保障した。同意書の同意するボックスにチェックをし、署名した場合を本研究の同意とした。参加者が同意した場合のみ、インタビューを録音した。個人情報の保護等を遵守した。

3) 省察モデル・ガイドラインの確認

(1) 研究対象者

質的帰納的研究デザインにより構築した省察モデル・ガイドライン（新人看護師版）の妥当性、重要性、実行可能性や現状について、インタビューを実施した病院とは異なる2ヶ所の一般病院・

33 病棟の看護師長 33 人、看護師 437 人を対象に調査を行った。

(2) 研究デザイン

横断調査研究であり、無記名自己記入式質問票を用いてデータを収集した。調査票の内容は、基本属性、看護師長には省察モデル・ガイドラインの妥当性（その内容は、新人看護師の転倒予防の臨床判断力育成につながる望ましい結果に結びつく）、重要性（その内容は、新人看護師の転倒予防の臨床判断力育成の向上に影響を与える）、実行可能性（その内容は、新人看護師の転倒予防の臨床判断力育成において、先輩（指導）看護師が実施できる）についてであり、新人を除く看護師には臨床判断・省察に関する考えやそれらの実践状況についてであった。調査票の配布は対象者のレターケースをとおしてであり、回収は誰が本研究に協力しているのかを明らかにされないために、個別に研究者へ郵送（後納料金の封筒を使用）にて返送とした。調査期間は 2020 年 1 月 27 日～3 月 30 日であった。

(3) 分析方法

IBM SPSS ver. 25/AMOS ver. 25 を用いて分析した。統計的有意水準は $p < 0.05$ とした。各変数・尺度の分布について記述統計を行い、正規・非正規性にに基づき解析を進めた。

(4) 倫理的配慮

本研究は、金沢大学医学倫理審査委員会から承認を得て実施した（承認番号：949）。研究参加は自由意思に基づくものとし、同意をしなくても何ら不利益がないことを保障した。調査票の返送をもって、本研究協力の同意とした。個人情報保護等を遵守した。

4. 研究成果

1) 省察の概念の探索

省察には複数の同義語（内省、反省、振り返り、内観）がある。広辞苑（電子版 2010）は省察を「自分自身を省みて考えめぐらすこと」と述べる一方で、内省を「自らの経験を振り返り表現することで、自分の感情やものの見方、考え方などを明らかにし、再び同じような状況となったとき、それをよりよい経験にするためにどのような対応をすべきか自分自身に問いかけるプロセス」、反省を「正しい状態に変えること」、振り返りを「過去を顧みる」、内観を「精神を集中して心中に自己の本質や真理を観察すること」と述べている。

デカルト⁷⁾は哲学の立場から形而上学の方法として省察を述べている。形而上学とは「現象を超越し、その背後に在るものの真の本質、存在の根本原理、存在そのものを純粹思惟により或いは直観によって探求しようとする学問」のことである。一方で Dewey J は、自分の考えを転換させる批判的思考につながる深く連続的に考慮する省察の重要性を述べ、Schon DA は Dewey の考えをさらに発展させ、1983 年に実践的省察を提唱した⁸⁾。Tanner CA は、看護における省察とは「自分が今行っていることを看護実践過程の中で考えて、自分の看護行為を進化させること、ならびに、一連の看護実践の後に、経験から学び取ること」⁹⁾（加藤訳）と定義しており、その定義や考えは様々な専門職の基礎教育・継続教育に影響を与えている。

本研究は、現象の超越性を対象としておらず、また看護師が自身の感情を抑圧して実践を振り返るといったモデル開発を避けるため、客観的に自身の考えの転換を指す省察という用語を用いて研究を進める。また、教育への貢献として看護実践力向上に貢献する省察モデルを開発するため、Schon DA から派生した Tanner CA の定義⁹⁾を用いて研究を進めることとした。

2) 省察モデル・ガイドラインの開発

(1) 基本属性

インタビューは 3 ヶ所の病院・15 病棟の 29 人に実施し、6 人の看護師長から意見を受けた。29 人の看護師経験年数（最小-最大）は 24.6 ± 7.8 (7-41) 年であり、職位はスタッフ 16 人 (55.2%)、主任・副看護師長 9 人 (31.0%)、看護師長 3 人 (10.3%)、不明 1 人であった。現在の所属病棟は、内科系 16 人 (55.2%)、外科系 5 人 (17.2%)、内科・外科混合病棟 5 人 (17.2%)、超急性期病棟 (intensive care unit, high care unit) 3 人 (10.3%)、認定看護管理者課程（ファーストレベル）の受講者は 6 人 (20.1%) であった。自分が受け持ちをした患者の転倒遭遇経験のある人は 28 人 (96.6%) であり、勤務時間内の転倒遭遇回数（自分が受け持ちをした患者、自分のチームメンバーが担当した患者の転倒遭遇回数の合計）は 13.6 ± 12.2 (3-50) 回であった。

(2) 省察モデル・ガイドラインの構築

【卓越した臨床判断の可視化】を行い、【何が原因で転倒したのか事実を振り返って考える】省察は臨床判断力育成に貢献するが、【罪悪感をもって転倒発生について考える】省察はその育成を抑制することが明らかとなった。一方で、【転倒発生後に自分の看護実践力の状況について考える】や【転倒予防に対する自己効力感（転倒予防実践に対する自信の程度）が高い状態】での省察は、臨床判断力育成の推進と抑制の相反する状態をもたらすことが明らかとなった。すなわち、新人や若手看護師の臨床から学ぶことの学習準備状態が十分に備わっていない状況での自身の実践力の省察には、力量としての限界がある。また、自己効力感が高い方が転倒予防に関する知識・技術、成功体験をもつ現れでもあるが、新人や若手では転倒予防に関する自己効力感をもつまでに至れる基盤がないにも係わらず高いということは、これからの看護実践過程で学ぶこと・気づくことを困難にさせる状況にあることが懸念されていた。

研究成果に基づき、インタビューの結果から「省察を取り入れた転倒予防臨床判断力向上の支援モデル（新人看護師版）」（図 1）を開発した。カテゴリは【 】、サブカテゴリは < > で示す。

モデルの枠組みは、【転倒予防の臨床判断力を備えるための知識・技術・態度の基盤をもつ】ことが臨床判断力育成の根本的位置づけであり、【先輩看護師の卓越した転倒予防の臨床判断力・技を自分の資源として蓄える】ことが応用的臨床判断力を備えるために必要なこと、そして自身や看護チームメンバーの転倒遭遇について【的確に転倒者特性と発生背景状況を統合して捉えられるための省察】を繰り返すことにより転倒予防臨床判断力が向上する。しかし、そこには常に<個別性を踏まえた学習支援>を取り入れる必要がある。また、本モデルでは自身が転倒に遭遇しなくとも、先輩看護師の卓越した転倒予防の臨床判断力・技を自分の資源として蓄える】ことにより、転倒予防の臨床判断力が向上する。

3)省察モデル・ガイドラインの確認
 看護師長からの回収数は24部(回収率:72.7%・有効回答率100%)であった。新人看護師を除く看護師の回収数は364部(回収率83.3%・有効回答率98.1%)であった。看護師長の看護職の臨床経験年数は31.3±4.5年、看護師長としての経験年数は4.7±4.6年、新人看護師の教育/指導年数は13.9±7.9年であった。モデルの妥当性・重要性・実行可能性の級内相関係数は(二元配置混合モデル 一致性)は、 $r=.693$ (95%信頼区間[CI]:.929-.884)であった。モデルのガイドラインとなる指針は、妥当性は $r=.995$ (95%CI:.987-.999)、重要性は $r=.995$ (95%CI:.988-.999)、実行可能性は $r=.955$ (95%CI:.988-.999)であった。

結論

本モデルとガイドラインは看護師の継続教育として使用可能であることが示唆された。モデルは、転倒予防に関する知識・技術と経験知をスパイラル的に蓄積して実践レベルにつなぐ能力育成の省察を取り入れたモデルになったと考えられた。しかし、表現が分かりにくいモデル・ガイドライン指標があるため、一部改善が必要であることが明らかとなった。

引用文献

- 1) 日本病院会 QI プロジェクト結果報告、2015 <https://www.hospital.or.jp/qip/past.html>
- 2) 松井典子, 他:わが国における施設高齢者の転倒事故に関する文献検討:老年精神医学雑誌, 17(1), 65-74, 2006
- 3) Hmpel et al., Hospital Fall Prevention: A Systematic Review of Implementation, Components, Adherence, and Effectiveness, J Am Geri. Soci.2013
- 4) Kato M, et al., Development of a fall-prevention program for elderly Japanese people, Nursing & Health Sciences, 10(4), 281-290, 2008
- 5) 丸岡直子, 他:看護師が転倒防止策を決定するまでの臨床判断の構造, 日本看護管理学会誌, 9(1),22-29, 2005
- 6) Walker LO, et al., Strategies for Theory Construction in Nursing 4th Ed. 中木孝夫, 川崎修一、看護における理論構築の方法, 医学書院, 2008
- 7) 村上勝三, デカルト形而上学の方法としての「省察 meditatio」について、あるいは、形而上学は方法をもたないこと, 国際哲学研究, 3, 143-155, 2014
- 8) Schon D, The reflective practitioner How professionals think in action, 省察的实践とは何か プロフェッショナルの行為と思考, 鳳書房, 2017
- 9) Tanner CA, Thinking like a nurse: A research-based model of clinical judgment in Nursing, J Nursing Education, 45(6), 204-211, 2006

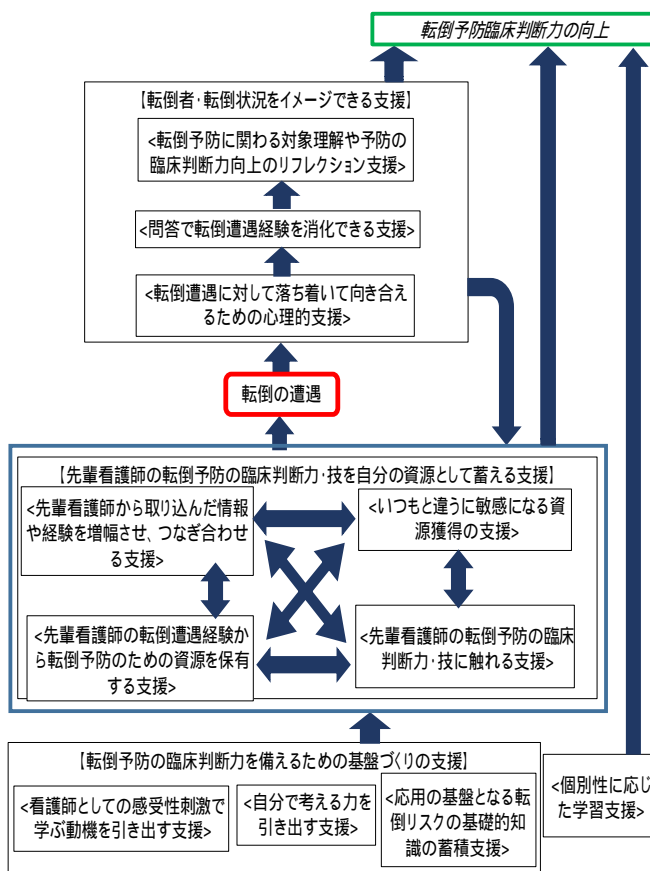


図1 省察を取り入れた転倒予防臨床判断力向上の支援モデル(新人看護師版)
 []:カテゴリ < >:サブカテゴリ 矢印(等):方向

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 加藤真由美、牧野真弓、富田利香 (equally contributed author)、浅川康吉、関井愛紀子、津田義正、岡部正興、中島ゆかり、正源寺美穂	4. 巻 6
2. 論文標題 介護老人保健施設の看護師と介護職を対象とした転倒予防連携プログラム介入の効果検証-非ランダム化並行群間比較試験-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本転倒予防学会誌	6. 最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 油野規代、加藤真由美、桂英之、正源寺美穂、小泉由美、山崎松美、正源寺美穂	4. 巻 5
2. 論文標題 終末期がん患者の生存期間1ヶ月間の転倒の要因	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本転倒予防学会誌	6. 最初と最後の頁 29-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoji Kokura, Mayumi Kato, Yoshimi Taniguchi, Kazuhito Kimoto, Yoshie Okada,	4. 巻 70
2. 論文標題 Energy intake during the acute phase and changes in femoral muscle thickness in older hemiplegic inpatients with stroke	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Nutrition	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1016/j.nut.2019.110582	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牧野真弓、加藤真由美	4. 巻 31
2. 論文標題 一般病棟の認知障害高齢者へ身体拘束回避で転倒予防する熟練看護師の思考と実践プロセス	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 看護実践学会誌	6. 最初と最後の頁 48-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤真由美	4. 巻 64
2. 論文標題 多職種による転倒予防アプローチにおける看護師の役割	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 看護技術	6. 最初と最後の頁 60-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牧野真弓, 加藤真由美, 正源寺美穂, 関井愛紀子, 浅川康吉	4. 巻 30
2. 論文標題 回復期リハビリテーション病棟の転倒予防における職種間の意識の違い及び多職種連携に関する促進因子と阻害因子	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 看護実践学会	6. 最初と最後の頁 32-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 加藤真由美, 泉キヨ子, 鈴木みずえ, 上野栄一
2. 発表標題 経験の浅い看護師を対象にした転倒予防のための臨床判断力育成に係る省察の仮説モデル
3. 学会等名 第39回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤真由美, 山下智子, 西島澄子, 木間美津子, 正源寺美穂
2. 発表標題 転倒予防センサの今とこれから: 臨床判断と省察からセンサを必要とする対象者選定とその望ましい活用へ
3. 学会等名 日本看護技術学会第18回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mayumi Kato, Kiyoko Izumi, Mizue Suzuki, Eiichi Ueno, Miho Shogenji
2. 発表標題 Unpreventable Falls Recognized by Clinical Nurses
3. 学会等名 Aging & Society: Eighth Interdisciplinary Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤真由美、泉キヨ子、鈴木みずえ、上野栄一
2. 発表標題 看護師の臨床判断における転倒につながる「ふらつき」の言語化
3. 学会等名 日本看護科学学会第38回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mayumi Kato, Miho Shogenji, Mizue Suzuki, Kiyoko Izumi, Eiichi Ueno
2. 発表標題 Comparison of nurses' clinical judgment and consideration of fall prevention between palliative care and orthopedic wards
3. 学会等名 The Asian Conference on Psychology & the Behavioral Sciences (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加藤真由美、泉キヨ子、上野栄一、鈴木みずえ、正源寺美穂
2. 発表標題 省察の概念分析-分析の目的と用法
3. 学会等名 日本看護科学学会第37回学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 湯野規代、加藤真由美、小泉由美、山崎松美
2. 発表標題 終末期がん患者の生存1ヵ月以内の転倒要因の検討
3. 学会等名 日本看護科学学会第37回学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 油野規代、加藤真由美、小泉由美、山崎松美、木戸口勝巳
2. 発表標題 生存期間1ヵ月以内におけるがん疾患患者の複数回転倒の実態
3. 学会等名 第11回看護実践学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宮下悦子、山下智子、木間美津子、加藤真由美、正源寺美穂
2. 発表標題 転倒・転落予測と予防の検討 - 病棟特性の違いから -
3. 学会等名 第11回看護実践学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加藤真由美
2. 発表標題 転倒予防に必要なアプローチ法開発の提案
3. 学会等名 老年看護学会第22回学術集会 7学会合同日本老年学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 正源寺美穂、加藤真由美、泉キヨ子、上野栄一、鈴木みずえ
2. 発表標題 転倒予防における「省察」の概念分析：概念の選択に関する検討
3. 学会等名 老年看護学会第22回学術集会 7学会合同日本老年学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 油野規代, 川浦幸光, 加藤真由美, 正源寺美穂
2. 発表標題 ターミナル期におけるがん疾患患者の転倒・転落の実態
3. 学会等名 日本老年看護学会第21回学術集会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 武藤芳照、鈴木みずえ、加藤真由美、他63人	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日本医事新報社	5. 総ページ数 394 (146-151)
3. 書名 転倒予防白書2019	

1. 著者名 鈴木みずえ、六角僚、小林小百合、加藤真由美、丸岡直子、平松知子、泉キヨ子、谷口好美、他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日本看護協会出版会	5. 総ページ数 248 (162-172、222-228)
3. 書名 認知症 plus 転倒予防 せん妄・排泄障害を含めた包括的ケア	

1. 著者名 武藤芳照、鈴木みずえ、加藤真由美、他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 日本医事新報社	5. 総ページ数 408 (91-94)
3. 書名 認知症者の転倒予防とリスクマネジメント 病院・施設・在宅でのケア 第3版	

1. 著者名 武藤芳照、鈴木みずえ、加藤真由美、他	4. 発行年 2016年
2. 出版社 日本医事新報社	5. 総ページ数 260 (99-104)
3. 書名 転倒予防白書2016	

1. 著者名 鈴木みずえ、片山はるか、加藤真由美、他	4. 発行年 2016年
2. 出版社 クオリティケア	5. 総ページ数 540 (115-153)
3. 書名 活動・休息援助技術、なぜ？できる！わかる！私の看護技術	

1. 著者名 真田弘美、正木治恵、加藤真由美、他	4. 発行年 2016年
2. 出版社 南江堂	5. 総ページ数 461 (64-78、126-144)
3. 書名 老年看護学技術 最後までその人らしく生きることを支援する第2版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<http://ronenrh.w3.kanazawa-u.ac.jp/>
老年リハビリテーション看護学分野

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	正源寺 美穂 (Shogenji Miho) (80345636)	金沢大学・保健学系・助教 (13301)	